

# 節子とエッセ化に記された芸術家たち

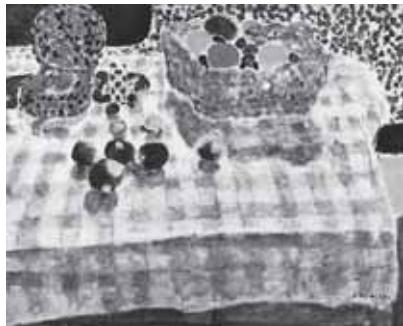
三岸節子はその生涯で多くの芸術家たちと親交を持ちました。節子が記した3冊のエッセイ『美神の翼』、『花より花らしく』、『黄色い手帖』には、彼らへのあたたかい言葉が綴られています。同時代を生きた芸術家たちとのかかわりについて、エッセイの言葉とともに紹介します。

## 陶芸家 宇野三吾

宇野三吾(1902-1988)は、京都市東山区に生まれ、帝展や国画会展、二科会展で活躍した陶芸家です。1950年には京都府美術工芸功労者、1955年には京都市文化功労者となります。古陶磁と釉薬についての研究を重ね、ペルシャ陶器の青に着想を得た独自の青色陶磁器を作り上げました。節子は、宇野の鮮やかな青の陶磁器をいくつも集めており、このように語ります。

宇野さんの青の時代の代表作で、このほかにも青の時代の大壺をいただいてみた、その中の傑作。青銅のやうにかたく、さまざまの鮮烈な青の変化が美しく、形といひ、色といひ、私の終生の愛する壺である。(『花より花らしく』)

宇野の作品は節子の静物画の画中にも、さりげなく登場しています(No.3、4、5)。



三岸節子 《静物》1943年 ©MIGISHI



三岸節子 《二つの像》1959年 ©MIGISHI

## ガラス工芸家 淡島雅吉

淡島雅吉(1913-1979)は、後に「しづくガラス」を創案したことでも有名なガラス工芸家です。東京都新宿区に生まれ、各務クリスタル製作所、保谷クリスタル硝子製造所(現HOYA株式会社)勤務を経て、1950年に淡島ガラス・デザイン研究所を設立しています。節子が保谷クリスタルのガラス工場を訪れた際、案内を行ったのが淡島でした。それ以来、親交が続き、1954年の淡島の初個展「淡島雅吉新作ガラス個展」の際には、節子が淡彩パステル画20点を描き下ろし、「三岸節子淡彩小品展」が併催されました。作品を贈り合うほどの仲だったといいます。

もう一つ近作に欠くことのできないモチーフにクリスタルグラスがある。どの花瓶も線が平凡ではない。淡島雅吉さんの作品である。(『黄色い手帖』)

《二つの像》(No.12)はこれまで埴輪を描いたと考えられてきましたが、淡島は節子から「《二つの像》はいただいた二つのガラスがヒントとなって出来ました」という手紙を受け取ったと語ります。改めて作品を調べてみると、当館が所蔵する節子愛蔵の淡島作品《オブジェ》(No.25)とよく似ているのがわかります。淡島の作品が大きく描かれる《二つの像》には、二人の親密な関係が示されていました。

## 陶芸家 八木一夫

節子は、前衛的な陶芸作品を次々に発表した陶芸家・八木一夫(1918-1979)とも交流を持ちました。八木は、京都市東山区に生まれ、1947年には前衛陶芸団体「走泥社」を結成します。「オブジェ焼き」を制作し、現代陶芸に新たな分野を構築しました。節子とは何点か共作を残しており、八木の焼成した陶器に節子が女性を描いた作品《花器》(No.26)や、陶板の《花》(No.23)を見ることができます。また、節子と八木は、ともに小説家・司馬遼太郎(1923-1996)の美術評論の中で、高く評価された芸術家でもありました。



三岸節子 《花》陶板、八木一夫焼成、1950年代後半 ©MIGISHI

## 洋画家 萩須高徳

萩須高徳(1901-1986)は、節子と同じく愛知県中島郡生まれの洋画家です。1920年に画家を目指して上京し、東京美術学校卒業後はフランスに渡ります。戦後はパリに居を構え、下町風景をテーマとした作品を描き続けました。1981年には文化功労者となり、1986年に亡くなった後には文化勲章が追贈されています。同じくフランスに渡り、暮らした土地・パリの風景画を残した二人ですが、節子は所属していた新制作派協会で萩須と出会った際、同郷の尾張出身であることに驚いたといいます。

愛知県からはすぐれた器量の画家は少ない。萩須さんが同じ生國だといふことはひそかに私に自信をつけ喜ばせた。(中略)中京人はこのすぐれた画家をもつと誇りにし大切にしてほしい。めつたにこれだけの芸術家を持つことはできないのだから。(『美神の翼』)

節子の言葉からは、出身地を同じくする萩須へ向けた深い尊敬の念がうかがえます。



三岸節子 《イル・サンルイの秋》1987年 ©MIGISHI

<三岸節子のエッセイ集>

・『美神の翼』1949年(44歳)初版、朝日新聞社 ・『花より花らしく』1977年(72歳)初版、求龍堂 ・『黄色い手帖』1983年(78歳)初版、求龍堂